

「健全／不健全な共同体愛」と DV について

伊田広行

質問をいくつか受けましたが、忙しいので、「健全／不健全な共同体愛」と DV と功利主義についてだけ、補足説明をさせていただきます。

いまの社会には様々な問題があり、それは暴力の問題としてとらえることもできる。そのときの理解の仕方として、「共同体愛」が健全であるか不健全であるかという観点で暴力をとらえることができる。

「何らかの共同体（組織、集団）への愛」を肯定する人が多いが、そのことから、暴力や差別や排除といった社会問題が起こっていることが多い。この「共同体愛」が健全であるか不健全であるか、そのよしあしを左右するポイントを知ることによって、暴力的でない対応をとることができるようになる。

この整理によって、多くの問題について自分のとるべきスタンスを的確につかみ取る力がつくと思われるので、教育的にも認識的にも、支援的にも、重要な「説明（認識）の仕方」であるといえる。

愛国心とか、人類愛とか、愛社精神、家族愛、夫婦愛、親子愛、恋人への愛、親友への親密な感情、スポーツやクラブ活動におけるチーム愛、クラスにおける仲間意識、地域共同体への所属意識、というように、共同体に対しては、様々な肯定的感情＝愛があるが、その共同体への愛が暴力（ひどいもの）にならないことが重要である。だが、多くの人にはそうなるかどうかのその境目が分かっていない。そのためわかりやすく、以下、この「共同体への愛が健全であるか、不健全であるか」という枠組みで、諸問題を整理していく。

まず一般論からいくが、会社や家族や学校や国家などある集団において、画一化の強要、弱者・少数派・異なる者への差別や排除や抑圧や支配といったことがあれば、それは問題だといえよう。それを「不健全」と呼ぼう。ではそうならないためには何が大事なのか。上記の問題は、個人よりも共同体の利益が優先されることに原因があるとまとめられる特徴があることから、「健全な共同体愛 A」か「不健全な共同体愛 B」かを分けるポイントは、シングル単位、個の自立、多様性、エンパワメント、「主流秩序への批判意識」、「より大きな共同体を考える」など――これをまとめて私はここではシングル単位系と呼ぶ――が重視されている共同体かどうかであると私は考える。

こうしたシングル単位系がちゃんと保証された共同体であれば 健全なものになるといえる。それがあると、個人が共同体の利益の犠牲になるということがなくなる。共同体が個

人の上位になることはなくなる。個人が共同体のために犠牲になることが強要されなくなる。多様な個人が尊重される共同体なのであり、多様な個人の幸せを支える共同体となる。「共同体のための個人」とされないことが重要である。その場合の共同体愛は「健全な共同体愛 A」となる。

一言でいえば、「健全な共同体愛 A」であるためには、シングル単位系が担保された共同体であることが大事であるということである。

そうしたシングル単位的な担保がない共同体の在り方である場合、大事なストッパーがないので、画一化の強要、弱者・少数派・異なる者への差別や排除や抑圧や支配といった不健全なものになってしまうといえる。個人よりも共同体の利益が優先される、共同体が個人をその配下に置く、個人が共同体のために犠牲になる、という状態になる。

これをまとめると、そうしたシングル単位系が担保されていない共同体は、「不健全な共同体愛 B」となる。共同体では、意識しないとどうしても、その熱狂や愛・連帯・団結・和という正当性のゆえに、個人の尊重・個人の違いが軽視されがちである。個人を押し出すと「勝手だ、わがままだ、エゴだ」と非難されやすく、「同調できないならこの共同体から出て行け」と言われがちである。多様性が損なわれる。そうならないための担保がシングル単位系のキープである。

この「不健全な共同体愛 B」の現れをもう少し具体的に見ておこう。

いまの主流秩序社会では、金や権力（強者）に弱い人が多い。そこに密接に絡まって、自分の組織を守るために不正に加担したり、証拠を隠滅したり、偽の証拠をでっち上げたり、うその証言をしたり、目をつぶったりすることがある。会社での出世競争、派閥争い、他者蹴落とし、パワハラやセクハラの横行などがある。企業不正の隠蔽や不当な他者抑圧は「不健全な共同体愛 B」のあらわれといえるが、なぜそうなるのか。

各人が、共同体を自分の上位に置かずに、自分の頭で思考し、より大きな基準（より大きな地球共同体）でおかしなことに加担しない自分をキープできれば、不正に加担せずにそれに抗議したり抵抗したりできる。

だが、シングル単位的な自立を各人がしておらず、共同体の下にいるものとおもっていると、こうしたことに果敢に抗議していくという姿勢をとらず、逆に、加担していく（積極的加担と消極的加担があるが）ことになる。現実はそのようなことが多い。その時の個人には、自分の保身として「長いものにはまかれろ」という姿勢がある。また、「自分の属する組織（共同体）を守るためだ」という論理がしばしば伴っている。「不健全な共同体愛 B」である。

この時の思考回路は、例えば、今この不正を世間に公表すれば、会社の業績が落ちて社員皆に迷惑がかかるとか、社会的にたたかれて組織が持たないから、企業不正は必要悪だと目をつぶっておこうというものである。そしてそういうことを「大人になれ」とか「青臭

い理想を言っていないで現実主義になれ」「会社は慈善団体じゃないんだよ」「お前、組織がつぶれることに責任取れんのか」などといって、ごまかしている。個人としては「自分はただの下っ端／歯車で責任者じゃないから命令なら仕方ない」「大きな社会の問題に私個人など何もできない」「家族を守るために、正義とかふりまわさずに黙っておこう」と思考停止することが多い。

こうした状況は、少し哲学的思想的に枠を広げれば、功利主義の肯定となる。多数派のためには、少数派の犠牲は仕方ないという考えである。「くもの糸」状態の世界観である。それは寓話「オメラスから歩み去る人」の提起する問題である。これは深い「生きる上での自分のスタンス」の問題であるので、「不健全な共同体愛 B」に甘んじるか、「健全な共同体愛 A」の道に行くかは、実はどちらが正しいかという簡単な問題ではない。

完璧はないので、現実には少数の犠牲は仕方ない、誰かを犠牲にした幸せかもしれないが仕方ない、といった感覚を持つ人は多いし、政治などある局面ではそれが現実ということもある。だがこれをあまり深めずに居直って肯定しすぎると、おぞましいものになる。「オメラス」の寓話はそこを問題提起している。が、程度問題で、多くの人は明確に犠牲者の上にいることを自覚しないことで（考えることを放棄して）なんとか自分の加担性に目をつぶり、主観的には幸せに生きている。自分がその少数にはならないという感覚で。これはもちろん、主流秩序の構造をものがたっているともいえる。

以上が、会社という自分の属する組織への所属意識=連帯意識が「不健全な共同体愛 B」になる例である。

いったん構造をこのようにとらえて、自分はオメラスの村の状態に甘んじるのか、「不健全な共同体愛 B」でいいのかという問いの前で、それと異なる道を考え始めることが重要であるというのが、私の提起である。

このまとめ方で DV 問題を整理しておこう。

「個人よりも共同体が上位で大事にすべき」をあからさまに認めると、たとえば DV やいじめ、自分の企業や国だけ幸せならいいということでの不正容認や他国抑圧主義となりがちである。それでいいのか。

例えば、DV は、パートナーとの共同体において、自他・各個人の区別や相違を重視せず、強者が弱者を支配してその意見の違いをなくし、強者の意見を弱者にも押し付け、結果として弱者の側の主体性をはく奪するものである。家族や恋人関係というものがうまくいくためには、弱者は言うことを聞いていけばいいのだという論理である。よくある言い方をすれば「2人がうまくいくためには、わがままを言わず、俺（私）の言うことを聞け、文句言うな」「夫婦がうまくいくためにはお互い我慢すべきだ。自己中になってはダメだろ。」

夫婦はおたがい役割を遂行すべき」「夫婦は一体だから支えあって依存しあって生きればい
い。甘えを許しあう関係がいい」といったものである。この考えを被害者も内面化すると、
「彼が怒るのは私わがままで勝手だからだ」「彼がDV的になるのは彼を怒らせてしまう
私のせいだ」「彼は私がいなくてダメなので、ダメな彼の世話を頑張りたい」となる。これ
が「不健全な共同体愛 B」である。

それを肯定するのか。「それで結果として家庭(カップル)はうまくいって来たじゃないか、
女性が下手に権利意識などもって自立とか対等など求めて、なんでもDV など言うから
ダメなんだ」、といった意見は、実は深いところでまだまだ人々の意識の底にある。「恋愛
とか夫婦愛って、理屈じゃないんだよねえ」、「愛って、正しい人を愛するんじゃないで、
ダメでもなんか惹かれる人を愛するもんなんだよね」「人には言えないドロツとしたものも
あるよねえ」、とって個人の自立と境界線と非暴力を軽視し、依存や支配を美化するのが
カップル単位思考である。そういう感覚はまだまだ日本では根来良いと思われる。シング
ル単位感覚はまだまだ日本社会では根付いていない。

だからDVをなくしていくためには、各人が思想的に強者中心主義ともいえる功利主義的
な正当化論に警戒的になることが必要である、すなわち、カップル(家族)が強者の思う
ような理想的な一体状態であるべき、皆は意見が一致しないといけない、個人は二人の調
和のために自己を犠牲にすべきだ、相手の言うとおりにすべきだ、という考えを捨てて、
違う人間が共存するためのシングル単位的な感覚をもつことが必要である。